

27PA-am109

中学生に対する添付文書を用いた薬授業の効果

○飯田 舞子¹, 圓子 沙織¹, 杉山 陽香¹, 深沢 茉莉子¹, 山本 実可子¹, 吉田 浩一郎¹, 大塚 雅史¹, 熊澤 美裕紀¹ (明治薬大)

【目的】平成 24 年に改訂された中学校学習指導要領では、保健分野において「くすりの適正使用」の項目が加えられた。その内容は、「医薬品には主作用と副作用があることを理解できるようにする」「医薬品には、使用回数、使用時間、使用量などの使用方法があり、正しく使用する必要があることを理解できるようにする」とある。OTC を購入・使用する際には自己判断の材料となるものが必要となり、薬剤師が専門家の立場で授業を行い、医薬品適正使用、OTC 医薬品の正しい選択方法などを指導することが望ましい。薬授業を通して、生徒たちが今後 OTC 医薬品を自己選択する際の判断材料として医薬品添付文書が読めるようになるために、その存在と読み方を知ってもらうことを目的とした。

【方法】都内私立中学校 3 年生に薬の添付文書に関する授業を行った。授業は 50 分間で行い、授業前と授業後には学校教員協力のもと授業補助の一環として添付文書の知識度に関するアンケートを実施した。授業では、実際の添付文書を用いて記載されている内容の確認や、総合かぜ薬と鎮痛剤の成分などの比較を行った。また、OTC 医薬品によっておこる副作用でステーブンス・ジョンソン症候群を例に写真やイラストなどを用いて説明を行い、さらに副作用救済制度についても触れた。

【結果および考察】今回の授業における生徒たちの意識変化について、授業を受けた約 70% の生徒から「添付文書を読んでみようという気持ちになった」という回答を得た。また、授業で扱った以外の薬の飲み合わせについても興味をもった生徒が多かった。このことから、生徒たちの薬の添付文書に対する興味を引き出したのではないかと考える。